

文化庁海外展 大英博物館帰国記念

国宝 土偶展

THE POWER OF DOGU



伸びやかに両手を上げるもの、出産間近の女性の姿を表すもの、極端に強調された大きな顔面のものなど、多様な姿かたちをする土偶は「祈りの造形」とも称され、縄文時代の人々の精神世界や信仰のあり方を表す芸術品として、世界的に高い評価を得ています。

本展は、イギリスの大英博物館で2009年9月10日から11月22日まで開催される *THE POWER OF DOGU* の帰国記念展で、国宝3件と多数の重要文化財・重要美術品を含む全67件で構成されます。縄文時代早期から弥生時代中期にわたる日本の代表的な土偶とその関連資料を一堂に会し、土偶の発生から盛行そして衰退までの過程を辿るとともに、その個性豊かな造形美に迫ります。

開催概要

〔会 期〕

2009年12月15日(火)～2010年2月21日(日)

〔会 場〕

東京国立博物館 本館特別5室(上野公園)

〔開館時間〕

午前9時30分～午後5時 *入館は閉館の30分前まで

住所 東京都台東区上野公園 13-9

お問合せ ハローダイヤル 03-5777-8600

ホームページ <http://www.tnm.jp/>

〔休館日〕

月曜日 *2010年1月11日(月・祝)は開館、翌1月12日(火)休館
年末年始 [2009年12月28日(月)～2010年1月1日(金・祝)]

〔観覧料〕

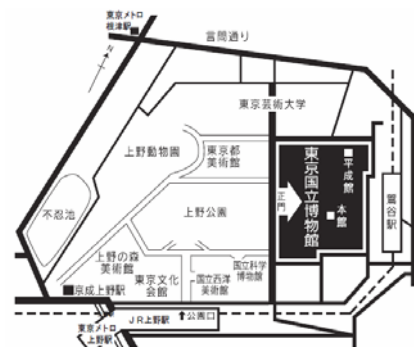
	当日料金	前売料金	団体料金
一 般	800円	700円	700円
大学生	600円	500円	500円
高校生	400円	300円	300円

*団体は20名以上

*中学生以下、障害者とその介護者1名は無料

*東京国立博物館、チケットぴあ(Pコード688-843)、

ローソンチケット(Lコード38841)ほか主要プレイガイドにて販売



JR上野駅公園口・鶯谷駅下車徒歩10分
東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅、
千代田線根津駅、京成電鉄京成上野駅
下車徒歩15分

〔主 催〕

文化庁、東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション、毎日新聞社

〔協 賛〕

日本写真印刷

報道関係お問合せ

「国宝 土偶展」広報事務局(ユース・プランニング センター内)

TEL: 03-5467-8638 FAX: 03-3499-0958

〒106-8611 東京都港区西麻布 2-25-18 麻布パレスビル

国宝土偶、勢揃い！

これまでに発見された土偶の総数は、およそ 18,000 点にのぼります。このうち国宝に指定されたものはわずか 3 点しかありません。この国宝土偶すべてが一堂に会すのは、本展がはじめての機会です。縄文人の精神性、造形力そして美意識が遺憾なく表現されたこれらの土偶は、まさに土偶の頂点にふさわしい風格を備えているといえるでしょう。



写真① 国宝 中空土偶

縄文時代後期（前 2000～前 1000）
北海道著保内野遺跡出土 函館市教育委員会蔵

内部が空洞となるつくりの土偶（中空土偶）としては、最大級の大きさを誇り、全身はきわめて緻密な文様で巧みに飾られています。土偶芸術の粋が凝縮されたこの土偶は、北海道唯一の国宝です。

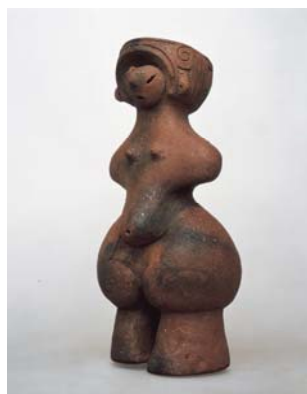
この土偶は、お墓と考えられる穴の中から発見されました。頭の上端と両腕を失っていますが、この部分は埋められる前にすでに破損していたことが発掘調査によって明らかにされています。災厄などを祓うために破壊されたのではないか、という説もあります。

写真② 国宝 合掌土偶

縄文時代後期（前 2000～前 1000）
青森県風張 1 遺跡出土 八戸市蔵

座り込み胸の前で合掌するその姿は、まるで神に祈りを捧げているかのようです。しかし、お産の様子をあらわしているという説もあります。独特の顔の表現から、仮面を付けた土偶とみる人もいます。

折れた右足には天然アスファルトで接着・補修した痕があり、この土偶が当時か大切にされていたかがわかります。また表面にはわずかに赤色塗料が残っています。おそらく当初は全身が赤く塗られていたのでしょう。



写真③ 国宝 縄文のビーナス

縄文時代中期（前 3000～前 2000）
長野県棚畑遺跡出土 茅野市教育委員会蔵

太い二本の足でしっかりと立ち、尻を後方に突き出す姿勢から「出尻土偶」とも呼ばれます。大型でしかも完形（欠けた部分のない完全なかたちで発掘されたもの）。まるで王冠のようなかぶり物を思わせる頭部に文様があり、その他の部分には文様がないという特徴をもっています。

ふくよかな女性の身体を柔らかい曲線となめらかな器面で表現したその姿は、まさに多産や豊穡を祈る人形（ひとがた）とされる土偶の美を代表するものといえるでしょう。

土偶ってなに？

土偶とは、人形（ひとがた）をした土製の焼き物です。ヨーロッパや西アジアの新石器時代（前 8300～前 5000）では、土偶は農耕と密接な関係を持ち、生産や豊穡を祈る地母神崇拝の像として発達してきました。

日本の土偶は、縄文時代の草創期（約 13,000 年前）に出現し、縄文時代中期（前 3000～前 2000）から晩期（前 1000～前 400）に最も発達して、個性豊かな土偶が数多く作られました。狩猟採集経済にあった縄文時代の土偶には、ヨーロッパや西アジアの土偶の性格をあてはめることはできません。

では、日本の土偶はなんのために作られ、どんなふうに使われていたのでしょうか。縄文土偶の解釈にはいろいろな説があります。

乳房や腰の張った造形には、母体から生まれでる新たな生命の神秘に根ざす再生と生産や、安産祈願の意味を読み取ることができるでしょう。豊かなる獲物の全体的象徴とする説もあります。

また、ほとんどの土偶が破壊された状態で発掘されることから、病氣や怪我を治すための身代わりだったという説もあります。

土偶のかたち

縄文時代のはじめ（およそ 13,000 年前）に出現した土偶は、顔や手足の表現がない単純・小型のものでしたが、乳房があらわされているので女性像であることがわかります。

それが縄文時代前期（前4000～前 3000）になると、単純ではありますが顔や手の表現がみられる三角形に近い板状の土偶が出現し、定型化の道を辿ります。中期（前 3000～前 2000）には、前期より引き継ぐ板状土偶が装飾性豊かな十字形土偶として発達する一方、関東・中部地方では立体的な全身立像が誕生するなど、地域性もみられるようになります。

続く後期（前 2000～前 1000）には、各地で実に多彩な土偶が生まれます。そして晩期（前 1000～前 400）には、抽象と具象を兼ね備えた土偶が東北地方を中心に展開され、芸術性に優れた中空の土偶も数多く誕生しました。



完存品（すべての部分が発掘されているもの）としては最大級の十字形土偶です。叫び顔を思わせるような顔の表現が特徴的です。頸部で二つに割れており、これらはおよそ 90mも離れた地点から発見されています。このような例は他にもあり、土偶が作られた目的や使用方法を探るかぎといえるかもしれません。

写真④ 重文 十字形土偶

縄文時代中期（前 3000～前 2000）
青森県三内丸山遺跡出土 青森県教育庁文化財保護課蔵



縄文人の造形意識、デザイン性の高さをこれほどまでに現代人にみせつける土偶はないのではないのでしょうか。この土偶には顔面はあるものも、目鼻口はありません。それは土偶が単なる人形（ひとがた）ではなく、精霊としての性格をも持つ存在であったことを示しているのかもしれない。

写真⑤ 重文 立像土偶

縄文時代中期（前 3000～前 2000）
山形県西ノ前遺跡出土 山形県教育委員会蔵



山猫を想像させる風貌をもった土偶です。多くの土偶には乳房があるのですが、この土偶にはありません。胸に当てられた左手は三本の指で表現されていますが、同様の表現は同時代の土器にもみられ、この時代の特徴的な表現といえるでしょう。

写真⑥ 土偶

縄文時代中期（前 3000～前 2000）
山梨県上黒駒出土 東京国立博物館蔵



顔面の形から「ハート形土偶」の愛称で呼ばれ、郵便切手の図案にも採用されました。具象と抽象を兼ね備えた土偶として古くから注目されてきました。簡単な石組遺構の内部に埋納された状態で発見されたと伝えられ、他の大型土偶とは違った性格を持つ土偶であったとも考えられています。

写真⑦ 重文 ハート形土偶

縄文時代後期（前 2000～前 1000）
群馬県郷原出土 個人蔵



三角形の顔は仮面を付けた表現とされます。つくりは中空で、表面はきれいに磨かれ、どっしりとした両足に支えられた胸部には繊細かつデザイン性に優れた文様が施されています。この土偶は、お墓と考えられる穴から発見されたもので、副葬品であったと考えられています。

写真⑧ 重文 仮面土偶

縄文時代後期（前 2000～前 1000）
長野県中ツ原遺跡出土 茅野市教育委員会蔵



この土偶ほど多くの人々に人気のある土偶はないのではないのでしょうか。大きな目が雪原の照り返しから目を守るイヌイットの遮光器に似ていることからこの名がつけられました。きわめて精巧なつくりの中空土偶であり、国宝級の風格を備えた土偶といえます。

写真⑨ 重文 遮光器土偶

縄文時代晩期（前 1000～前 400）
青森県亀ヶ岡遺跡出土 東京国立博物館蔵

土偶の仲間たち

土偶の性格を考える上で、また縄文時代の人々の精神生活を考える上でも欠かせないのが、土偶形容器・岩偶・人頭形土製品・土面・人形裝飾付土器そして動物形土製品などの存在です。

土偶が粘土を整形し焼き上げた造形であるのに対し、岩偶は柔らかな石を彫刻的に削り出した造形です。静かに眠ったような顔の表現を持つ人頭形土製品は、死者に捧げられたデスマスクのようです。土面は、額に当てて仮装の道具としたり、墓標として墓柱に吊るされたりしたとも考えられています。

さらに、裝飾モチーフとして人体のデザインや顔面が用いられている人形裝飾付土器や動物形土製品も、土偶の仲間としてきわめて重要なものです。



土偶の影響を色濃く残す造形です。中空のつくりの内部には焼かれた幼児骨が納められていました。幼くして死亡した幼児をあたかも母親の胎内に戻すかのように人形の容器内に納め、再生を願うといった習慣があったとも考えられています。

写真⑩ 重文 土偶形容器

弥生時代前期（前4世紀～前3世紀）
神奈川県中屋敷遺跡出土 個人蔵



柔らかい岩石を削って彫刻的に人形をつくりだす岩偶。その数は土偶に比べ圧倒的に少ないですが、土偶と共通する性格をもつものと考えられています。この岩偶は、精緻な彫刻表現をもつものとして古くから注目されてきた優品です。

写真⑪ 岩偶

縄文時代晩期（前1000～前400）
岩手県岩泉出土 日本民藝館蔵



これだけリアルに人頭を象った土偶はほかにはありません。全体の表現からこの土偶は、仮面をつけた人物表現であるといった見方が有力です。同時に脚の一部も発見されており、全体を復元すると高さ1m前後となるようです。

写真⑫ 重文 土偶頭部

縄文時代後期（前2000～前1000）
岩手県稗内遺跡出土 文化庁蔵



東北地方で盛んにつくられた遮光器土偶に共通する顔面の造形です。両眼の端には孔がみられますが、これはおそらく紐を通すためのものでしょう。また土面の内側が椀状にくぼんでいることから「仮面」としての機能が考えられます。しかし、実際の人の顔よりは小さいことから、額にあてて仮装に用いられたり、墓標として用いられたりしたのではないかと考えられています。

写真⑬ 重文 土面

縄文時代晩期（前1000～前400）
秋田県麻生遺跡出土 東京大学総合研究博物館蔵



深鉢の胴部にまるで踊る土偶を貼り付けたような特殊な土器です。人物は、冠状の帽子を被り、やや上向きで口を開け、頬には入れ墨を施しています。こうした表現はこの土器が発掘された地域の土偶と共通しています。果実酒用の醸造器や太鼓として使われたという説があります。

写真⑭ 重文 有孔罎付土器

縄文時代中期（前3000～前2000）
山梨県鋳物師屋遺跡出土 南アルプス市教育委員会蔵



今にも走り出しそうな猪形土製品。その造形はきわめて写実的で、猪の特徴をよくとらえています。狩りに関わるまつりなどに用いられたと考えられています。猪は多産であることから、縄文社会においては、豊猟あるいは豊穰のシンボルだったのではないのでしょうか。

写真⑮ 猪形土製品

縄文時代後期（前2000～前1000）
青森県十腰内遺跡出土 弘前市立博物館蔵